



環境ふくい推進協議会 30 周年記念インタビュー



吉川 守秋さん

企画委員 平成8年度～平成30年度、企画委員長 平成30年度
特定非営利活動法人「エコプランふくい」理事

長年に渡り環境ふくい推進協議会に携わっていただいた吉川さん。

幅広い知識と行動力で福井の環境保全をけん引してきた第一人者です。

私自身、環境問題が気になりだしたのは今から半世紀前

今から50年ぐらい前、大学生だった頃、洗剤問題というのが全国的にありまして、湖とか川とか海の富栄養化、そんなような環境問題に学生の時に少し関わって、その後、地域生協の福井県民生協に就職しましたので、そこで食品添加物とか、洗剤や石鹸運動など環境問題に関わってきました。

環境ふくい推進協議会ができる頃の30年前というのは、まず1992年にリオデジャネイロの地球サミットがあって、その次に1997年の第3回気候変動枠組条約締約国会議COP3で

京都議定書の締結、その1997年の1月にナホトカ号の重油流出事故があって、福井ではボランティアの活動が大いに盛り上がった時期だったんですね。

それ以前の環境問題というのは大きくは公害問題。公害問題というのは被害者がいて加害者があるという関係で、被害者の救済や環境汚染の改善という、そういう形だったものが1990年代にリオの地球サミットを契機にして地球環境問題という形に変わってきたわけです。地球環境問題というのは、以前の公害問題とは大きく形が変わって「全世界の人が被害者ではあるんだけど加害者でもある」というそういう時代になってきて、じゃあその地球環境をどういつぶに守っていくかという時代になったんですね。

その中で環境ふくい推進協議会というのは、県が主導しているわけですけど、その構成員としては企業も入るし、それから市民も入るということで、行政と市民と企業が協働して環境に取り組んでいくということからスタートしたというふうに記憶しています。

私自身、1998年に「エコプランふくい」という市民団体を立ち上げたんですけれども、そのエコプランふくい自体も、行政と企業とそれから市民が一緒にあって、実際の環境活動を実践し連携して環境問題に取り組んでいきたいという趣旨で作っていますので、そういう状況の中で、私自身も環境ふくい推進協議会に関わらずを得なかったわけです。

それから30年経っているわけなんですけど、環境問題に対する市民の取組みであったり、企業の取組みがありました。そして、つい最近になって危機感が増して

きた、ようやくSDGが話題となり浸透してきて、企業はかなり熱心になってきていると私は思っているんです。

市民なり市民団体の方がどうかというところ、若干停滞感もじゃないかなというふうに感じていまして、本来目指してきた行政と市民と企業が協働して進めていくというところには、まだまだ至っていないというのが現状だと思っています。これは残念なことです。

市民活動の継続の難しさや環境ふくい推進協議会の今後

市民の環境問題への取組みは、当然継続していく必要があるんですけども、やっぱり「力」がないと継続できないですよ。『力』っていうのは財力もそうですし、人材もそうですし、一般的にいう「人・もの・金・情報」ということなんですよ。そういう「力」がないと継続できない。だから、そういう「力」が市民と市民団体に継続的に備わっていき拡大していけるようなそういう土台を作るべきだろうと思っています。

それは行政の本来の役割であり、環境ふくい推進協議会もそういう役割を担うべきだと思っただけで、残念ながらあまり担いきれてなかったんではないかなというのが私の感想と課題です。環境ふくい推進協議会が30年経ってこれからどうしていくかという展望ですが、私の個人的な意見としては、この課題を発展的に解消できれば素晴らしいんじゃないかなと思います。環境ふくい推進協議会が本来持っている三者「行政と市民と企業」の協働の体制を確立できるように

するのを目指すべき方向だと考えています。これを「これからの人」に託したいと思っています。

「行政と市民と企業」のパートナーシップが重要

三者が対等に、良いことも悪いことも含めた話し合いというか、「コミュニケーション」を三者がもって持つということが福井県のパートナーシップにとって重要かと思っています。

今、私が携わっていることでいいますと、再生可能エネルギーの事業を地域主体・市民主体でやるというのが私の一番大きなテーマになっています。例えば、小水力発電、県民生協がやっているような大きな規模（500kW規模）ではなくて、もっと小規模な小水力発電ができる地域というのは福井県内にたくさんあると思うので、そういうところで地域が関わって地域主体で事業化ができるというかなと思っています。それを、行政や企業が協働していくことが重要なんですけど、なかなか形になっていかない。ちょっと歯がゆいですね。ですから、やっぱりひとつずつ形を作っていく、それを蓄積をしていくことによって、さらに発展していけるというのが、非常に大切だと思います。特に市民レベルの活動とか、市民団体としての活動は、本当にひとつずつ作り上げ、形にしていってというのが重要だと思つたので、そういうことをするところが、福井県全体の環境問題対策の底上げにもなるというところを理解いただいて、企業も行政も、後押しをしてけると良いのかな。そう考えています。

今後、環境ふくい推進協議会へ託すこと

考えていることを一つでも、形にしていっていただくをやっていかないと、単なる雰囲気だけに終わってしまうのが地球環境問題だと思っています。

私たちは今、温暖化で暑いとか、大雨が頻繁に降るとか、そういう現実を目のあたりにしているわけなんですけど、それが果たして実際に自分の行動や生活とどのように関係しているのか？ どれだけ結び付いているのか？ というのがなかなか理解しづらい。ですから、それを結びつけられるような状態を作っていくことが大切。これは、行動もそうですし、考え方もですね。価値観ですね。特に価値観を変えていかないとダメだと、私はずっとこの地球環境問題の中で思っているんです。

「ひとつずつ作っていく」ということが大事、必要。ぜひ皆さんに頑張ってもらいたいと思います。



高井健史さん

企画委員 平成20年度〜、企画委員長
令和元年度・令和4年度〜、育成支援
部会委員 平成27年度〜・部会長 平
成27年度〜令和5年度
福井県民生活協同組合 渉外広報部次長

環境ふくい推進協議会の中核を担う
組織のトップランナー。
持ち前のフットワークで全国を飛び
回り、多くの情報を吸収されています。

始まりは生協としての環境対策から

私が生協に就職したのが2001年。
環境担当に関わり始めたのは2003
年からです。

30年前、1994年当時は、まだ私
は生協に就職していませんが、生協
では90年代からリサイクルに極的に取
り組みはじめ、1978年の京都議定
書のあたりから、事業者の立場から温
暖化防止の取り組みを意識し始め、2
000年には環境ISO（ISO14
001）を取得し、温暖化防止のため

の取り組みを進めてきました。1995年
には県内でもまだほとんど普及していな
かった太陽光発電の導入も行いました。

生協が本格的に温暖化対策を始めたの
は2010年頃なので14年くらい前にな
ります。当時は、チームマイナス6%を
目標に、温暖化を去年よりも少しでも減
らすことを目標にしていまして、もっ
と大きなダイナミックな変革が必要と感
じるようになり、省エネだけでなく再エ
ネにも舵をきりはじめて、F・E（再生
可能エネルギーの固定価格買取制度）を
活用した太陽光発電の導入にも取り組ん
できました。再生エネルギーに関してモ
チを入れ始めたのも2010年代後半です。

この他にも生協の立場での消費者教育
や、市民啓発の取り組みでは、リサイク
ルや3Rの取組み、エシカル消費では、
環境配慮型の商品の普及や、リサイクル
出来るような商品の拡大など、環境配慮
型の商品を普及していく取組みも200
0年代入ってから取り組んできました。

環境ふくい推進協議会には平成20年から
携わる

私が、環境ふくい推進協議会に関わる
一番の理由って何なんだろうって考えた
時に、一つは生協にとってメリットがあ
るからという自分の組織に活かせるとい
う意味合い。もう一つ同じくらい大事な
ことが「やっていて面白いな」って思え
ることだと感じています。例えば、「福
井県ふるさと環境フェア」に関わらせて
いただく中で、福井の中で環境に関わっ
ている多くの人たちと繋がることができ
たというところは自分の中では大きなメ

リットと感じています。

環境ふくい推進協議会をきっかけに繋
がる人も増えましたし、地域で環境保全
活動や環境教育に取り組んでいる方々とも
話をするのもでき、協議会は「貴重な
場所」と思っています。福井県が事務局
を担っていることで、県の人とも繋がり
を持ち、生協としても相談できたり、ア
ドバイスを買えたりと、自分自身にとっ
ても環境問題への意識と知識向上に役立
っています。今は終了しましたが「エコ
生活推進会議」は、市町の環境担当者が
集まるような場所で、担当者とも話がで
きたり、繋がりを作ることもできました。
環境問題に向かっている中で、いろん
な方々とネットワークを作れたことがと
ても大きなことだったと思っています。

今必要なのは「フンチーム福井」

例えば「エコチャレ」という取組み
があり、今年は名称が変わって「エコ活
ふくい」となりましたが、どうしても1
年単位の目標になりがちです。環境対策
は「長期継続」が大切なキーワードにな
るんですが、年単位の予算や一年の展開
だけでなくその年度を超えた展開がなか
なが難しいというところを実感していま
す。

また、育成支援部会では、未来創造事
業で支援してきた団体が、助成後も環境
ふくい推進協議会と繋がり、地域も含め
てパートナーシップを作っていきたいら
いのですが、助成までの関係で終わって
しまい、そのあとのネットワークづくり
までたどり着けていないことが、課題だ
と感じています。

環境ふくい推進協議会は、環境政策課
の中にあるので、環境政策課の議題に対
しては比較的对応できるのですが、そこ
を超えていくとするとハードルがある
んですよ。でもこれからは、いろいろ
な方面と結びつかなければ環境問題に立
ち向かっていけない。それだけ多岐に渡
って環境問題が大きくなりすぎてしまっ
たということなんです。そういった意
味でも他部署との連携が必要になってい
ます。例えば河川や土木なども環境とつ
ながりあるところが出てきたり、農水で
やっていることが、実は環境保全と強く
関係していたり、「エコや環境」の視点
は、SDGs以上に組織を横断して広げ
ることが必要だと思っています。さらに、
県内で活動している企業も含めてもっ
と幅広いネットワークを作っていけたら面
白いです。最終的には福井がワン
チームになっていく。その時に、環境ふ
くい推進協議会がネットワークをつなぐ
役割を果たしていけるというかなと思っ
ています。

必要なのは、もって「環境ふくい推進協
議会」を知ってもらうこと

まだまだ「環境ふくい推進協議会って
何者？」というところはあるので、もっ
ともっと外に広報していく必要があると
思います。同時に、やはりネットワー
クを作れるところはどんどんネットワー
クとして繋げていって、いろんな幅を広
げていくことが大事なかなとも思ってい
ます。

最終的には、私自身、環境ふくい推進
協議会がよくなることよりも、この協議

会を通じて、福井県が「いつでもよくなっ
てくれるところがあるべき姿なのだな」と思っ
ています。いくら協議会がよくなっても、
福井県が焼け野原になってしまったので
は全然意味はなくなってしまいます。「環
境ふくい推進協議会があるおかげで、福
井県のこと良くなったよね」というよ
うな、何かひとつでも分かりやすいもの
を作っていけると一番いいのかなと思
います。きれいごとではなく、この協議会
がちゃんとしたプラットフォームになっ
てなきゃいけないと思うんです。

いいツールは世の中をいいものにでき
る。ですから環境ふくい推進協議会をい
いツールにしたい。それはみんなに使っ
てもらえるようなツールになること。そ
んな視点が大切なのかと個人的には思
います。



環境ふくい推進協議会 30 周年記念インタビュー

畑中雅博さん

企画委員 平成24年度
特定非営利法人エコプラザさばえ 事務局長



鯖江の環境教育の第一人者。「どんぐりおじさん」の愛称で、子どもたちから慕われてきた。
頑固な反面、実は優しい畑中さんです。まさに環境団体にこの人あり。

環境素人だから垣根なくできた

当初、正直に言つと私は、ほぼ環境についてと素人でした。当初はよく、他の理事たちから言われました。「そんなんで、あんたできるんか？」というように。環境もいろいろな分野があり、自然環境とか資源循環もあれば地球温暖化とかエネルギー関連もあります。うちも一応環境NPOですがそれぞれ分野の専門家みたいな人はあります。でも、私はどれも素人でしたので、逆にと素人故に、どの分野の人とも均等に接することができました。「エコネットさばえ(鯖江市環境教育支援センター)」という存在は「いろいろな分野を網羅して啓発していかなかん」という立場ですから、それぞれの分野の人と均等にお付き合いバランスを取りながらいろんな啓発活動ができたという意味では、私がと素人だからこそ良かったなと思います。

事務局長になる直前まで、市民活動としてはPTAの鯖江市連合会の会長を2年続けたり、県の連合会でも副会長を3、4年活動、その他にも青少年育成活動をしていましたので、各学校の担当の先生方との接点つていうのはものすごく多かったですよね。それが功を奏して平成20年に私が現在のエコネットさばえの仕事をはじめた時、それまで関わっていた先生方が校長や教頭に昇格したんですよ。その先生方がみんな同意してくれて校長会の決をとって「エコネットさばえの環境教育活動を全小学校で一斉にやろう」と言ってもらえました。それがめちゃくちゃ運が良かった、巡り合わせが良かったと思います。

一番印象に残っているのは、今でも継続している「どんぐりからの森づくり」という事業です。

この前、宴会があり飲みに行った時ですが、うちの集団眺めて、隣にいた22、23歳ぐらいの若者集団が「どんぐりおじさん来たー」と言ってくれたんです。子どもから言われることはありますけど、あの大人の若者集団から「どんぐりおじさん！」って騒がれたのは初めてで、やっぱり長い間やっている、こういうことなんですね。本当に嬉しかったですね。

環境ふくい推進協議会に関わって「つながった」ありがたいこと

環境ふくい推進協議会で、(株)増田喜の社長と仲良しになったことは良かったです。

福井県はもとも学校給食の牛乳100%ピン供給でした。それが、ピンの生産ラインを止め、廃棄したいというのがバック供給にさせてほしいという話が舞い込んで来た時、県のPTA連合会をあげて、猛反対をしました。

あれは、すごく思い出に残る話です。3Rなんて全く私は知らなかったんですけど、バックよりはピンの方がいいと思っていました。「リユース」ですよね。で、みんなでそういう運動をしまして、実際実現したんですよ。それから4、5年前までずっと全国唯一、100%のピン供給つていうのをやってきたんです。

ところが数年前からついに一社がもうピンの生産ラインも古くなったので止めざるを得ないとなりました。ですから、福井県内半分はピン供給、半分は紙バックという状況になっています。鯖江は残念ながら紙バックになって、今、牛乳バックは全部燃やす「ミ」として捨てられています。

なかなか紙のリサイクル業者さんは、200ccの牛乳バックを嫌がるんですね。採算的にとれないつていうことですね。こんな話をしたら、(株)増田喜さんが「よし、もうちょっと時間くれ」つて言ってくれて、採算取れて回収できる方法をいろいろ考えてくれました。今試験中なんです。一つの学校でテスト的にやってみようしました。低学年でも問題

なくできそうということなので、先日校長会に提案させて頂きました。もちろん押し付けるつもりはなく、できる学校から始めてくださいと申しましたが、現在徐々にやりたいと申し出て下さる学校が増えて参りました。もしかしたら今年度中には市内全ての学校で出来るようになればと期待しています。

こういった環境ふくい推進協議会での出会いはありがたかったですね。(株)増田喜さんとエコットさばえとのつながりから始まって、鯖江でできたら県全体までできるはず。もちろんそれには環境ふくい推進協議会の協力が必要だと思っています。最終的には、まず鯖江で成功させて県全体に広げたいという夢を持っています。

環境NPOの未来が欲しい！

今、環境ふくい推進協議会は30周年ですね。この協議会は、我々NPOも関わっていますが、会員になっている企業さんが多いですよ。そうすると、そういう企業さんたちは担当の交代など新陳代謝がありますが、私たちのようなNPOには、ほとんど新陳代謝はないんですね。どちらかというと、みんな歳をとってしまつて、苦しいところまで来ています。新しいNPOとか新しい活動団体とかはぽつぽつ現れてきているのですが、そういう感じの新陳代謝しかできないんですよ。NPOそのものの中での新陳代謝つてすごく難しいと感じています。私たちの年代が頑張れば頑張るほど、あの人がついてこないんですよ。こういう悩みは皆さんとも実感していると思います。

ます。ですから、環境ふくい推進協議会としてもこういった課題を考えて欲しいと思っています。私たちが止まつてしまつたらできなくなることが沢山あるんですよ。みんな歳とつてから時間がありません。「もつと本当に苦しいところに来て」と思います。



増田喜一郎さん
企画委員 平成30年度、育成支援部会
委員 令和6年度
株式会社増田喜 代表取締役

環境フェアをきっかけに環境ふくい推進協議会に関わっていただくことになった増田さん。
リサイクル業界の若きリーダー。その思いの強さは本物です。

大量生産大量消費の時代から環境保全へ変貌

私の業界は「リサイクル」という言葉を借りながら未だ売買中心に収益を目的とした生業をしているリサイクル業者が多いです。もちろん企業を存続するという意味では大事なんですが、当社の場合は、しっかりと本来の本質である「ごみ減」に繋がっているような活動であったり、地球環境を意識した啓発を仕事の一環としてやっているというのが他の古紙業者さんとの違いかなと思っています。

そういう方向を考えているので、例

えばオフィス古紙の掘り起こしの「エコ紙くらぶ」という商品を作ったり、次に新しい展開として「エコブルームラック」という名前、紙袋に家庭の紙「ミ」を入れていただき、それを企業なり、学校なり、毎日利用するようなところに持ってきていただけて集約する仕組みに至りました。こういった取り組みが、実際のサービスの展開と向上にも繋がってきている実感があります。ですので、儲けるためだけにやっているわけではなく、地域の循環型社会への貢献というものを意識した企業としての考え方、価値観はあると思っています。

環境保全意識の必要性

やはり当社で働く社員には、何故増田喜で働いているのかという意義をしっかりと持って働いてもらうようにしています。自分たちがしっかりとお金を稼ぐ手段としての「リサイクル」と、その「リサイクル」を通じて世の中と関わっているのかをしっかりと意識できる働き方をしてもらっています。例えば、世の中には、タバコを吸って空き缶を灰皿代わりにする人がいますが、当社ではそういうことしたら大変です。私の部屋に呼び出して厳重注意、「リサイクル」に携わっている者が「リサイクル」でできないものを作っているんだと。そういった姿勢で臨んでいいますので当然そのような社員はおりません。そういった「心」で仕事をし、はじめてお客様に「リサイクル」を訴えられるのだということ、それが結果的に良い働き方になり、良い人間を育てていくということに繋がると思っています。

ます。ですから社員教育の一環の中にも「リサイクル」を通じて自分教育みたいなものもしっかりと入れてやっています。よく周りから「増田喜さん、いい社員だね」と言ってもらえるようになった要因かと思えます。嬉しいと思う反面、私も緊張感持たなくては日常的に考えています。

環境ふくい推進協議会に関わって10年

環境に深く関わる仕事をしていながら環境づくりに広げていくのは一部しか見えていなかったというのが、環境ふくい推進協議会に関わらせていただけて気が付き反省した部分です。

例えば、自分たちの社業に注力するのはもちろんですが、環境ふくい推進協議会を通じて周りを見てみると、本当に地味にでも未来の事を真剣に考えてくださっている方がたくさんいるという事がわかり逆に励みになりました。例えば、公園で草を刈っている方々もそうですが、今まで気が付かなかったことに気付けるようになりました。私の中の環境という概念がかなり広がりました。落ちていた「ミ」は言ひ前に拾おうとか、そういったことから始めて、社内ほとんど広がり始めた部分があります。当社の経営縮小は、物を大事にしようという表現です。環境という大きな社会の中で、私が物事の本質を捉えられるようになったことで、会社も良い方向に変化してきた部分は実感しています。

S・B・T（温室効果排出削減目標）認証というものを受けていますが、それがきっかけでもあったのがパッカー車という

「ミ」収集車。あれは一度会社を出たらずっとエンジンが回りっぱなしでエンジン切る時がありません。排気ガスを出しながら廃棄物を回収していることが、地球環境に良いことをしながらも悪いことしているというジレンマがずっとありました。ですので、せめてエコドライブを徹底しようと言いつけています。そういった心と姿勢でやっていくことが、環境に寄与するに当たり大事なことになるんだと強く意識するようになりました。さらに「紙をリサイクルするとこれだけの立ち木が守れますよ」という表現だけではなく、「これぐらいの焼却に関わる税金が浮きますよ、焼却に出すと紙を燃やすにあたってこれぐらいのCO2が出ますけど、リサイクルをすればこれぐらいのCO2で済みますよ」ということも伝票に載せるようにしています。伝票を通じて社会貢献というか、行っていることが実際にどれぐらいCO2削減に寄与しているのができるだけわかりやすく発信をしています。

こういったことがいろいろと重なり、紙という身近なものから「リサイクル」を定着させていきたい思いはさらに強くなりました。

リサイクルは「未来へのリターン」

環境ふくい推進協議会の表彰について、今、環境といふくらいで思っているのは、表彰の対象者が自然にまつわるような方が目立つて多いように感じます。それはそれで表彰に値すると思うのですが、それだけではなく、是非、3Rという視点にも注目いただきたいと思っています。リデ

ユースという部分で努力されている企業や、リユースでの具体的な活用事例があったりとか、そういった実働の活動が見えるところも環境ふくい推進協議会として表彰していただけたとありがたいと思っています。その辺がこれから増えると思うので、当社が関わっている意味になってくるかなと思います。

「リサイクルは未来へのリターン」だと思いついて「自分のためだけではなく誰かのことをもって考えるのがリサイクル」だといふふうに位置づけています。誰かのことを思っているという心と姿勢と行動が「リサイクル」であり、その小さな活動が集まって大きな力になって環境保全に現実的に大きく繋がると考えます。「リサイクル」をそのように意識してもらえたらいいと思います。環境ふくい推進協議会が行っていることが全部が同様であり、未来の子供たちに残すことがこの「未来へのリターン」。大事なことですよ。

環境ふくい推進協議会という協議会に入れていただいている身として、自分たちの会社が地球環境や、また、地元福井に対してどれぐらい環境が良くなるような活動に寄与できているのかをより深く考えるようになりました。その前提で私たちの社業を通じて何が環境に貢献できるかというのを考える時、さらに燃える「ミ」の中から「リサイクル」でできるものを作っていくことが私たちの使命だなと思っています。

私の思い、環境ふくい推進協議会が強い発信源になっていかに「リサイクル」を多く進められるかがポイントになってくると思っています。より一層お願いします。



坂本均さん

育成支援部会委員 令和元年度・令和5年度

合同会社ノーム自然環境教育事務所代表



福井県で環境教育といえばノーム自然環境教育事務所の坂本さん。福井の自然体験活動のパイオニアです。難しいことはあまり語らず、原体験を大事にするアウトドアマンです。

自然環境教育を始めて25年

ノームを始めてもう25年くらいになります。2000年に個人事務所として始めました。最初はアッチコッチと場所を変えていましたが、ハックルベリーの森との出会いがあったから、森を活かした森林環境教育を中心に進めました。週一の「森の幼稚園」や森の整備と遊びを融合したり、自然との関わりを持ちたい地域団体さんと事業を展開したりしましたが、なかなか上手いきませんでした。まだまだ、森林整備や教育だけで食べていけない社会構造ではなかったことに気づいた次第

です。今でも続けられているのは、当時環境関係のボランティアの方に「あと10年たてば坂本さんの時代が来るよー」と言われたことが大きいですね。13年くらい後にその方から「あと10年たてば坂本さんの時代が来るよー」と全く同じ言葉を頂いたのが、次の10年に続いている？（笑）。社会構造自体は大きく変化してないですが、そこに暮らす人々の環境や健康への意識はかなり高くなったように感じます。その中で仕事が増えているかというところはそれほど変わらないと思います。手弁当自体に問題はないですが、続けて行くにはやはり事業化していかないとかなかなか広がりもないし、「食べていけない」という希望が見えてこないと感じる人もいないし、きちんと仕事として社会の歯車の一つになるようにと考えています。

環境意識の高まりに合わせて、エコ・ツーリズムなる分野も注目され始めたのに合わせて、身近な里地里山をテーマにしたエコツアーを始めました。カヤックだったり自転車やスノーシューもそうですが、「観光」的な要素を取り入れたエコツアーだと、自然のことも伝えられるし、環境教育も可能だし・・・豊富な里地里山資源をフィールドに機会も訪れる人たちの年代もきめて、いままでは接点の少なかつた多様な人たちへのインタープリテーションが増えてきたように感じます。

六田師（奥越地域）で始めたのは、春夏秋冬がきちんとあって雪が降って夏は暑いくらい冷たい水があって川があって盆地もあって山もそこそこあって田んぼだったところ・・・多様な地域環境が

多様な生物を育てているという希少な「里地里山」が身近にあるからこそ、今でも続けていけているのではないかと考えています。このような仕事をしたくて特に選んだわけじゃないけれど、ここで「始めたのは良かった」と今でもこの地域に感謝しています。

特に、「ハックルベリーの森」との出会いが大きかったですね。おおよそ2ヘクタールと小さな森ですが、生き物の多様性にかけては貴重な場所だと思います。子どもたちが遊ぶのにも、安全的な視点からでも、なかなかこういう平らな森って少なくなっていますね。

環境ふくい推進協議会に参加してよかったこと、協議会へ求めたこと

良かったことは、関わりを持つと知らない人とも繋がりができたりしたこと。そういう意味で言うといい場だったのではないかと思います。

逆に、残念なのは、そういう場があった繋がりを持てたとしても、一緒に何かをやるかって言ったらできなかったです。よね。そういう行動につながるものが少なかったように思います。イベントに参加しても、それはあくまで個々の集まりであって、何かと一緒にというのがほとんどなかったように思います。それはなかなか残念ですね。機会と場があるのにもったいないです。何年間に1回でもいいので、何かテーマを決めて、出展じゃないでみんなで運営する場があると面白いと思います。誰がどの役割をして「今年のテーマはどしよう？」から始まり、場所を決めたり誰を呼ぶとか協議したり・

・全国的にもそのようなフォーラム（集い）がありますが、今からでもいいので、チャレンジしてほしいですね。近隣の県では頻繁に開催されていますので参加するのいいと思います。

あくまで個人的な思いですが、実際に1日でもいいからみんなその場で顔を合わせて、ワークショップをしながら、それぞれ思いに理解を深めることが大切だと思います。あちこち行かなくても、そこに参加することで、その人の、団体のことわかるじゃないですか、こんなことしてるんだとか。大体はみんなね、もうおおよそわかっているんですよ。おおよそわかっているけれど、具体的に何かを一緒にやったりとか・・・してほしい。強く思います。

環境ふくい推進協議会の助成事業について

やはり受ける側もジャッジする側も責任があるので、それをきちんと受け止めないといけない。ノームとしては受ける側もジャッジする側も両方をやりました。受ける側としては、いったん受けたらきちんと最後まで。その年とか、あるいは助成が終わる、何年が終わったおしまいではなく最後まで、きちんと最後までやるよという意識はあります。細々ですが今でも当時の助成で始めた事業は続いています。

だから、ジャッジする側になった時にもそういう視点で、気持ちを込めて話をすると、しっかりやるよよ。やつぱり助成が終わっても続けていけるような気持ちとか姿勢が大事だと思うし、そこを言

ための助成であってほしいですね。

これからやりたいこと

具体的には、やりたいことはたくさんあるけど、それを形にするのはしんどいですね。なんで止まっているかといったら、自分たちだけではできないので。環境ふくい推進協議会が提案してくれてみんなのところに持ってきて、「じゃあこれ誰か一緒にやらない？」って協議会が応援しながら実行するというのがアリだと思います。

最近、気になるといっていることを

最近特に気になるのは、実際に見たことがないのに、森の散歩の中でも虫や樹のことについて名前を言える子がとても増えてきたことです。「知ってる、知ってる」と。初めてみる虫でも「知ってるよ」と。TVやインターネット世界の影響ですかね？ 小さいころにどんな体験をしたのかは、大きく違った時に生かされるわけだから、その辺がもしかしら問題・課題なのかと強く感じます。そういう意味では「原体験」は大事かもしれないですね。子供の時に自然をベースにした原体験をどんなにしないといけないと思いますよ。養子さんともそのようなことを言われていますね。

地球温暖化の問題にしても、実は、現場（自然環境や生き物たち）調査から得られるデータが途方もないですよ？ その「数字」は現場から生まれてくる「生の情報」ですよ。

例えば、海のプラスチックは海外から流れ着くだけではなく、山からも来るし山奥に埋め立てた産業廃棄物からとか・・・では自分たちの暮らしや地域からどんなものが出てくるのか、「歩いて調べてみよう」と、そんなところを大切にしたいと思っています。

自然体験教室に参加して理解したはずだけれど、そこで完結するのではなく、全てが環（な）が（て）つ（て）つ（て）いるんだというのを、これからも意識していきたいです。



島田 和子さん

企画委員 令和6年度、育成支援部会
委員 令和3年度・部長 令和6年
度

公益社団法人

ふくい・へららの研究所 理事

公益社団法人くらしの研究所の理事
として、また一般の主婦として、環境
ふくい推進協議会の運営に携わって
いただいています。

環境専門家の多いこの協議会の中で
素直で真理を突いたご意見をくださる
貴重な存在です。

**環境ふくい推進協議会の委員活動を
感じていただろう**

私が環境ふくい推進協議会に携わっ
た当初は「委員の役割はエコ活動を推
進する程度だろう」と簡単に考えてい
ました。実際に会議に出てみると、環
境保護、保全、維持など議題は多岐に
渡っていて、そこから手を付けたらよ
いのか戸惑ってしまったのが正直な印
象です。その結果、環境を保全し改善
していくことの前に、現状維持すら

難しいのではと感じ、環境活動から距離
を置きたい気持ちになった時期もありま
した。

地球環境を改善していくなんて大がかりなことは、全人類が一丸となり足並みを揃えてアクションを起こさなければ成功しないだろうとも感じていました。しかしこの協議会で知ることが、わが町福井にも環境について深く真剣に考え行動している方がいらつしやるという事実でした。

会議の在り方について気づいた点もあります。環境ふくい推進協議会の会議では、多くの書類が配布されます。事前資料が郵送され、会議室でもまた同じ資料が配布されるのです。環境保全を掲げているが大量の印刷物には少し違和感を感じました。私以外の委員さんからも同意見があり、ペーパーレス化へと改善されたことは良かったです。

育成支援部会の委員活動で思ったこと

今年度から、育成支援部会（本来創造事業の助成団体の部会長を拝命しました。環境保全に対して頑張つて活動している事業者の様子をより詳しく知ることができそうです。個人的に応援したいと思えるような団体さんもありましたので、そういう方々と巡り会えたのは嬉しいことです。育成支援部会に関しては改善すべき点もあると考えます。「助成金を出しますから、あとは各自「自由になつて」という野放しな印象にならないよう工夫したいです。まずは相手の気持ちにしっかりと寄り添い、活動内容についてよく審議したいです。よりよい成果が出るよう的確

なアドバイスを提供した上で、助成を決定することが大切だと思います。

実際には、委員の方々が助成申請団体へ対し入念に質問したり、具体的にアドバイスもされています。活動の様子を視察するなど、今後もしっかり見届けていきたいと思っています。

また、助成を申請する環境教育や環境保全等の団体の皆さんは、自分たちの活動で手いっぱい、めいっばい、頭いっぱい、という印象が強いです。思考や視野が狭まってしまっているのを感じます。

これまでの通例やご自身の経験に振り回らないでほしいと思います。委員の多くは県外の事例にも詳しい方が多いので、県内にとどまらず県外の例なども提示して差し上げれば多いに参考になると思います。集客の方法や情報発信の仕方など良いところをどんどん真似て、柔軟な考えを広げていってほしいです。そうすることで申請団体の申請への考え方も多様になり、申請もしやすくなるのではと感じています。それこそが意義ある助成制度だと思います。

また、県内の中学・高校生にも、これらの助成金制度があること、行政を頼ることで自分たちだけではできないことも実現できるといふことを伝えてあげることが必要だと思います。生徒たちが何かに挑戦しようというときに「お金がないから出来ない時代じゃありませんよ」「クラウドファンディングをする前に一度、県の制度を頼ってみませんか」などアピールしていただくのです。若い力をもっと育むために、学生への支援は欠かせないと思います。

環境教育や環境保全の団体を見て考えたこと

池田町の「森のようちえん」さんを例にあげましょう。野山で子どもたちを遊ばせる活動がメインなのですが、とても素敵な活動だと賛同したくなる一方で、自然体験のプログラムを用意してあげないといけないくらい、親子が自然に触れていない時代なんだということを感じました。

私事で恐縮ですが、我が家も実は自然体験が極端に少ない家庭です。子供たちは「虫も嫌い、土も嫌い、海水もべたべたするから嫌い」という有様です。ですから、これまでに海水浴も一度きり、それも足だけ浸かってきたような瞬間海水浴でした。子供たちは「海の中には何がいるかわからないから入りたくない」と言って波打ち際で過ごしていました。

私自身も子ども時代、週末のたび、父母が海へも山へも連れて行ってくれました。そこであったにもかかわらず私自身、自分の子にはそういった自然体験をいつのまにか用意しなくなっていたのです。「嫌がるから」「帰りの車内が砂だらけになるから」といった理由で連れて行かなくなっていたことは、反省すべきことです。

わかっていても難しい環境問題

頭では理解していてもなかなかできないのが環境問題への取組みです。自分さへよければ良いという、自己中心的な考え方になっているから難しいのかなと思います。

誰もがエアコンをかけていて、自分た

け節電なんて意味はあるのか。資源を大切に使うといういながら、都会のネオンスルーされています。「明らかに何かおかしい、違う」というように、まずはそこに気づくことが第一歩だと思います。

スーパーで夜遅くに買い物する時夜9時まで営業しているスーパーがあつてありがたと思うのですが、生鮮食品がまだたくさん売れ残っている。この残った食品はどうなるだろう。当然、期限が切れれば廃棄されます。それから、みかんの値段がすごく高い、6個入りで千円。これでは一般家庭ではもう買えません。でも買ってもらえないみかんは何日も売れ残り、最後は処分されます。これで本当に良いのかと不思議な気持ちになりま

す。みんなでこういった疑問を持っていたら環境も変わっていくのかもしれないです。これも大事な気づきですね。そしてそれは小売りの場だけではなく生産者の場でも起こっています。先日、三国まで農家さんのところへ人参を買いに行きました。規格外品は市場で買ってもらえないとのことでした。小さな人参が百本入って千円でした。スーパーですと、立派な人参3本入りで300円もする時にです。「一体なんでしょこれ

は」と思っています。規格外の野菜の場合、農家さんは捨てるしかないとお話。仕方なく自分たちで手売りする。「規格という基準」のあり方を考えさせられた出来事です。

こうした普段の生活の中での「気づき」が環境を考える始まりのような気がします。パタフライエフェクト、小さな気づきこそが大事なことだと思います。

**環境ふくい推進協議会の活動を通して自分
が変わったこと**

最後に、環境ふくい推進協議会に関わって、自分が考えたこと、変わったことを箇条書きで書かせていただきます。

●モノが溢れすぎていることが残念だと思ふようになった。

●過剰包装を断るようになった。

●規格外野菜などを積極的に購入するようになった。

●農家さん、生産者さんから直接買うようになった。

●日本は、清潔さや完成度の高さを追求しているなと感じるようになった。そのため捨てられるものが増えても多いのが残念。十分使えるのに廃棄されてしまう。完成度の高さに「美意識」も含まれる傾向があるのだと思う。なかなか合格をもらえない製品や食材はかわいそう。

●お菓子のパッケージについて、切り込みはもろろ、切り裂きやすいようなラインが組み込まれている。その技術、ホスピタリティが誇らしいと思うようになった。

環境ふくい推進協議会も30周年を迎えることになりました。どうか皆様も、日常の小さなことから「気づき」を育てていってください。私も微力ながら努力したいと思っています。